一条条間路の調査（平城第647次）

今回は共同住宅の建設にともない、法華寺町において発掘調査をおこないました。平城宮跡の東のこのエリアは、藤原不比等邸跡に造営された法華寺や、海龍王寺等があり、平城京の調査では重要な地域の一つです。調査地は法華寺旧境内北部を東西方向に通る一条条間路と、その北側溝が想定される場所にあたります。東西５ｍ、南北14mの調査区を設定しました。

調査の結果、一条条間路やその北側溝を確認することができました。一条条間路北側溝は、溝の幅が約6.3m、検出面からの深さは約0.9mありました。埋土は５層に大きく分けられ、平安時代の緑釉陶器や土師器の羽釜が出土しました。都が平城京から遷った後も、溝は使われ続けたのでしょう。また北側溝内からは東西方向の２条の杭列も検出しました。溝の北岸付近で４本、溝の中央付近で３本打たれており、いずれも杭の直径は７cmほどです。取り上げた杭の全長は約１ｍでした。これは平城京の造営計画をあきらかにする上で、貴重なデータといえるでしょう。

しかし、発見はこれだけにとどまりませんでした。一条条間路北側溝の下で、平城京造営にあたって巨大な溝を埋め立てるための地盤固めの遺構を検出したのです。

溝は幅が南北11m以上、検出面からの深さは1.4m以上と、北側溝をはるかに上回る規模で、調査区の北へと続きます。古墳の周濠にも匹敵する規模の大きさです。溝の底部付近には特徴的な黒色の土が堆積していました。溝を埋め立てた積み土の最下層で、地盤固めの遺構とみられます。この土は有機物由来とみられ、２層に分かれます。上層では広葉樹とみられる葉を確認し、土師器や埴輪片・陶棺片等が出土しました。下層には大型の自然木が複数並べられていました。

この遺構は、奈文研の本庁舎建て替え工事の際に検出した、敷葉（しきば）・敷粗朶（しきそだ）工法と、植物の枝葉を用いる点で類似します。敷葉・敷粗朶工法とは積み土の下に植物の枝や葉を敷き詰め、土を滑りにくくしたり、土中の水を逃したりする技術です。これは軟弱地盤の埋め立てに用いられるものですから、調査地周辺も軟弱な土地だったのでしょう。

今回は、奈良時代の工事の規模の巨大さに驚かされた調査でした。このような大規模な地盤固めの工事の痕跡は、当時の土木技術の水準の高さを現在に伝えてくれます。　（都城発掘調査部　山崎 有生）

調査区全景（北から。中央の溝は一条条間路北側溝）

一条条間路下層の溝（北から）